生命平和
～憲法をまもるために

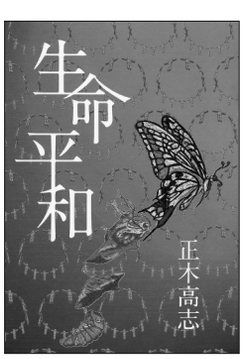
正木 高志

50年まえの冬から春にかけて、ちょうど今ごろですが、ネパールを旅していました。

Kathmandu for X'mas という言葉が口伝てに広がり、欧米の若者たちが続々とカトマンズを目指したのです。イスタンブールでその言葉を耳にして、ヒッチハイクでカトマンズへ向かいました。その冬に1000人くらいがカトマンズに集まったのではなかったでしょうか。それが世界中から若者たちがインドへ、ヒマラヤへと巡礼をはじめた、最初の年になりました。

カトマンズに車が３台しかないといわれていた時代です。持っていたのは国王とアメリカ大使館と外国人専用のホテル・アンナプルナ。インドからのトラックやバスが到着する町外れの広場以外で車を目にすることはなく、街中の狭い通りはさまざまな民族衣裳を着た人々や、ヒマラヤを越えてきたチベットの隊商などであふれていました。もちろん電気はなく、夜には灯明の暗い火影が揺れて、辻々で歌われる神々への讃歌が盆地の空に響きわたりました。

旅人の集まる食堂は２軒しかなく、ときどき訪れては日向ぼっこをしながら、半日くらい話をして過ごしました。食堂でも、数人で借りていた部屋でも、会話によく出てくる一つのキーワードがありました。「too late」という言葉です。手遅れ？何が手遅れなのか。「文明列車が走っているレールは断崖絶壁にむかっている。列車は止まることも方向転換もできない。手遅れだ」というのです。私もまた文明社会に「吐き気」をもよおして旅に出たのでした。文明列車から降りることがドロップアウトであり、新しい乗りものを創造しようとしたのがカウンターカルチャーでした。



『生命平和』
正木高志著／
A5版43p／
ふくしま文庫／
百円＋送料
40冊以上、送料無料／
電話：0968-27-0212　正木 高志
メール：maisamasaki@gmail.com

それから半世紀たちました。文明は方向転換したでしょうか？いえいえ、終末資本主義はますますスピードを上げて断崖絶壁へまっしぐらです。311からもうすぐ６年になるというのに２号機の格納容器内の空間線量が毎時530シーベルトというのですから。チェルノブイリのときに首相だったゴルバチョフが「ソ連は原発事故で崩壊した」と証言していますが、３つの原子炉がメルトスルーしたフクシマは３つの国が崩壊してもおかしくない巨大事故です。それでも原発を再稼働させる狂気の経済。改憲へむけて暴走する安倍政権。今日の日本は50年前にカトマンズで語られていた文明列車が、まさに「断崖絶壁から墜落しはじめた」状況です。もっとも墜落する文明列車の先頭に日本がいて真っ先に落ちることになるとは、あのとき思いもしませんでしたが……。もちろん列車だから日本が落ちたらアメリカもイギリスも全世界がそれに続くことになるのでしょう。

この原稿を書いている今日は立春。庭の白梅の花がほころび初めました。寒さのピークに春の兆しが生まれるのですね。文明史を研究したイギリスの歴史学者Ａ・トインビーは「ある文明が崩壊すると、崩壊の原因となった問題を解決する新しい文明が誕生して、救世主の役割をはたす」と語っています。

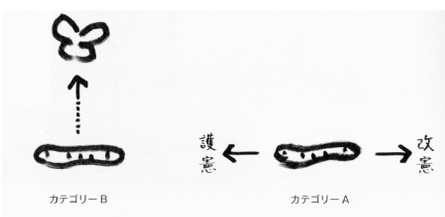
3000年前の中国の書「易経」の６４卦の２３番目に「剥」という卦があります。寿命が尽きてあらゆるものが剥がれ落ちる世相です。ウィキペディアには「時代が大きく変化して、長い間の変わらぬ信条、憲法が時代の変動にともなってガタガタと揺れるさまを表す」とあります。まさに今の日本の世相ではないでしょうか。原発が壊れ、経済が崩れ、悪法がはびこり、国民の人権がおびやかされて……いまや平和憲法も風前の灯火。

しかし「剥」の注釈に「碩果不食」という言葉が記されています。碩果は「もっとも立派な果実」のこと。「あらゆるものが剥落するとき、もっとも大切な果実は食べられることなく、新しい時代の種となって、復活の芽をだす」という意味です。「剥」の次の２４番目が「復」です。国家の上に掲げられている平和憲法はまさにその碩果です。憲法９条は食われないで残る。そして新しい時代は９条の種から芽を出す。

自民党の改憲草案の是非を問う国民投票が今年はおこなわれるでしょう。憲法は国家のヴィジョンです。311後の日本のヴィジョンが問われます。自民党の改憲案はヴィジョンというより戦前の「富国強兵」への回帰であって、行き暮れた社会の幼児返りのようなものでしかありません。一方の護憲派は、独自のヴィジョンもなく、護る一方です。

新保守と旧革新が右か左か争っている政治（カテゴリーＡ）には若者たちが参加する余地はなく、投票率は上がりません。この構図で戦っているかぎり、メディアを支配して国民の不安を煽り、不正選挙も辞さない改憲勢力に対して、護憲派の歩が悪すぎます。

だけどもう一つ選択肢があります。芋虫が右へ行くか左へ行くかではなく、「地を這う芋虫が蝶になって空を飛ぶ」道です。私たちが目の当たりにしているのは現代文明の終焉です。憲法論議を「文明の死と再生」という文脈でとらえるとき、問われているのは新しい文明のヴィジョンです。日本は現代文明に代わる再生のヴィジョンを掲げなければなりません。

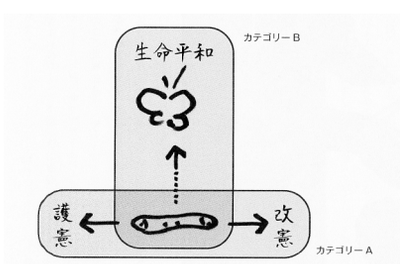


７０年前に原発はありませんでした。

平和憲法があり、戦争はしなかったけれど、原発事故で平和が失われてしまいました。

ヒロシマをくり返さないため平和憲法が生まれたように、フクシマをくり返さないための憲法が必要ではないでしょうか。原発をゆるさない憲法、いのちの憲法が。

９条は一字一句変えてはなりません。平和憲法に「いのちの憲法」を加えた、いわば「生命平和憲法」。

改正を急ごうというのではありません。フクシマを経験した日本にはヴィジョン・クエストが必要なはずです。自民党草案を否決するためには、護憲というだけでなく、オルタナティヴなヴィジョンを掲げる必要があります。

新しい政治文化は選択肢のカテゴリーＢに生まれるでしょう。それは若者たちを惹きつけて投票率を上げるでしょう。閉塞状況に光をもたらすのは創造的な運動です。カテゴリーＢの生命平和というヴィジョンは、カテゴリーＡでは護憲です。二つのカテゴリーが混線することなく統合されたら、私たちは多数になるでしょう。